

福井市社北小学校
令和 7 年度 9 月号
R7.9.25 発行

〒918-8055 福井市若杉4丁目143
☎0776-35-2821 (fax:35-2719)
Mail : y-kit-e@fukui-city.ed.jp



♪学校の HP はこちらから。学年のおたより等も見られます。



おたよりは
カラーで見る
ことができます

校内体育大会に向けて

9月の下旬となると、朝晩涼しくなり、気温が30度を超えることがなくなり、すっかり秋らしくなってきました。学校では、来月に予定している

体育大会に向けて、それぞれの学年に応じて計画を立て練習を始めました。盛り上がっているのは学年だけではなく、先日は、各組を引っばっていく応援団による応援披露がありました。夏季休業明けから6年生の応援団長・副団長を中心に応援リーダーで考えてきたものです。



この日は、まだまだ暑かったため、体育館で行いましたが、応援団の元気な声がよく響いていました。来週からは、校庭での全体練習が始まります。昨年度は、長い猛暑の影響もあり、夏の疲れが出て最初の練習では、何人かのお子さんが、具合が悪くなって保健室で休む様子が見られました。今年度は、昨年度のこの時期に比べて幾分涼しい気はしますが、十分な休憩や水分補給の時間を確保できるよう注意していきます。どうぞご家庭でも、励ましの声かけや健康管理をお願いします。また、まだまだ暑い日がありますので、汗拭きタオルや十分な水分も忘れずに持たせてください。

校内体育大会スローガン

「一致団結 目指すは頂点 全力出しちゃだめですか」

体育大会では、高学年のリーダーシップ、中学年の団結力、低学年の協調性など、それぞれの学年らしい頑張りと成長が見られます。特に応援練習では、リーダーを中心に練習している様子を見ると、特に顕著に表れます。応援リーダーは、5・6年生の自主的にやりたい児童がするのですが、誰でもできるというわけではなさそうです。それぞれの色で、全体をたくましく引っばり、時には優しく支えたりすることができる子供たちが選ばれるようです。自分たちの色のイメージや思いや願いをもとに、コールや手拍子、振り付けなどを決め、低学年に教えに行き、少しずつ応援団をまとめていきます。応援練習の初期の頃から見ていて感じるのは、当日までに考えたり悩んだりするプロセスに大きな成長があります。応援団に入っていなくても、各色を支える5・6年生の子供たちの役割がきちんとあるのも本校の特徴です。今年も、6年生全員がそれぞれの学年や色に分かれて教えにいきます。また、5年生は5年生のリーダーたちで、5年生の応援全体をまとめていきます。6年生は、最高学年そしてたてわり班長という責任とやる気をこれまで以上に強く感じているのではないかと思います。また、5年生は、来年はいよいよ自分たちの番だと自覚し始めているはずです。

各色のテーマです！

協力・強力・響力！

全力・パワー!!!

最強・最高・限界突破！



日本の教育って？

私たちが「あたりまえ」と思っている日本の教育が、海外から注目されています。どんなところが注目されているのでしょうか。



日本の教育は、その子供なりの「できる」「わかる」を増やすことが前提です。子供たちの「漢字」を例に考えてみましょう。学校で新しい漢字を習うと、「漢字ドリル」や「漢字ノート」を用いて何度も練習をします。また、漢字に限らず、どの教科も「どれだけできるか」を確かめるために「テスト」で確認をします。そして、合格するまで何度もテストをするなどして、全教科の基礎的な力をまんべんなく伸ばすことを目指すことが特徴と考えられます。これにより、あきらめず繰り返し取り組む姿勢を身につけ、「努力によって力がつく」と考えられています。また、学力だけでなく「心の教育」としての道徳教育も重視されています。子供たちの協調性や社会性の育成を目的として、道徳の授業が必修化され、対話を通じた学びが取り入れられています。このような日本の教育は、単に知識を詰め込むのではなく、人間性の形成に大きくかかわるものであり、今後の開かれた社会においても強みであると評価されています。



本校では、R5 年度より、海外からたくさんの教育に関わる方が研修に来ています。日本の文科省に相当する職員や学校長、研究教員の方々は、本校の様子を見て、次のようなことに驚いていました。

- ☆給食がある(配膳をしている、手を合わせ、食べられることに感謝する、静かに食べている)
- ☆掃除をする(子供たちも教員も掃除をしている、最初にあいさつ、終わりに振り返りをしている)
- ☆違う学年で交流をしている(たてわりの活動や学団集会、委員会活動、集団登校など)
- ☆学校がきれいで落ち着いている(机や下足箱が整頓されている、集団で移動するときには整列して歩く)

私たちが、当たり前だと思っていることが、海外の学校関係者から見ると、『日本の教育のすごいところ』なんだと改めて気づかれますね。



「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、 12歳になる頃には日本の子どもは“日本人”になっている」

この言葉は、山崎エマ監督作品の映画『小学校～それは小さな社会～THE MAKING OF A JAPANESE』のキャッチフレーズです。日本の小学校は「小さな社会」として機能し、単なる知識伝達を超えた人間形成の場となっているということが海外の国々で注目を集めました。実際に私も鑑賞しましたが、1年生女兒の合奏メンバーオーディションから本番の成功に至るまで、また6年生男児の運動会での縄跳び発表まで、その児童の成長が手に取るようにわかり自然に涙があふれてきました。そして、それに関わる子供や教員の姿を通して、規律を守ることや他人を思いやることを大切にする「小学校」を「小さな社会」とする意味も理解できたように思います。



この映画は、コロナ禍だった頃の東京都杉並区の公立小学校の日常を追ったドキュメンタリー映画です。先ほどの私たちが当たり前だと思っているような日本の小学校の教育の「良さ」と「課題」に改めて気づかれます。6歳から12歳という大切な時期の集団生活が社会性の育成につながっていること、行事などを通じて協働したり困難を乗り越えたりする体験が協調性や忍耐力・継続力の育成につながっていること、給食当番・係活動等による自主性が責任感の醸成につながっていること、掃除や整理・整頓の日常化が生活習慣の定着につながっていることなどが、海外では驚きをもって受け止められており、このようなことが、日本の集団性、協調性の高さを支える土台になっていると考えられます。とはいえ、協調性が行き過ぎてしまった場合の弊害として、同調圧力や個性の見落としなどがあるかもしれないと気に留めておく必要はあります。海外から見た日本人が消極的に見える理由のひとつに挙げられるかもしれません。そのために、「小学生の間にどんな力を育てるのか」はもちろんですが、昔から日本人として大切にされている「不易と流行」の「不易の部分」を明確にして、つまり「不易の部分＝あたりまえのこと」、これからも、あたりまえのことがあたりまえにできる子を目指して、家庭・地域と学校が協力していきたいと考えています。

ご紹介した映画は、もう公開されていないようですが、この映画に関する動画はたくさんあります。1年生女兒のドキュメンタリーが短編として紹介されています。こちらをどうぞ →→→

